



認知症のある人と向き合う
—診察室の対話から思いを
ひきだすヒント—

大石 智 著
新興医学出版社
2020年10月 224頁
本体価格 2,200円+税

認知症を専門にする諸先輩は、いつも落ち着いていて、洒落で、診療以外の趣味にも一家言があり、会話も得意という印象を、書評子は自らの交友範囲においてもっている。本書の著者は、まさにその最たる方で、きっと認知症と人生の重みを抱えた当事者と普段の診療で接するうちに、磨かれてきたセンスなのだろうと推測していた。何かの機会に、認知症診療の秘訣と、この治療的人間力の極意を学びたいと思っていたが、その鍵となる一冊が本書であると考えた。

認知症は緩徐に進行していく病態であるゆえに、治療や、ある程度の期間での寛解が治療目標にならないところが、医療者、当事者・家族にとっての苦悩であり、かつ予防や、薬物療法への医療者や当事者、一般市民の過剰な期待、誤解など、社会的にも注目され、議論のある領域である。そのような現状を踏まえて、認知症を抱える当事者にとって必要な言葉とは、当事者、家族、社会が望んでいる説明とは何か、診療のなかで省察されて、まとめられている。

本書は、縦書き大きめの文字で、若い医師はもちろん、学生、ともすると当事者家族でも理解可能なほど、平易な表現で全編語られている。また明るいところでもインクの色が僅かにくすんだ青色なのが、一貫して謙虚に語る著者の姿勢を表しているようにも感じられる。テーマごとのまとめの「当事者に伝えたいメッセージ」や本文中に、著者自身、診療場面で使っているであろう、具体的な台詞が載せられている。とても優しく、わかりやすい語り口の

なかに、時に刺さるような本質を突く表現をみることができ、やはり、言葉の使い方がうまい。

全21回にわけて、扱われているテーマは、診断と治療、アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症など型ごとの解説などで、一見、入門書的な教科書と同様にみえるが、認知症の非専門医が陥りがちで、かつ間違いに気づかず診療を続けていそうな誤診、検査、特に画像診断の解釈における注意点などにも言及され、臨床上有用な指南書でもある。認知症とアルコール乱用の合併例や、前頭側頭型認知症の問題行動へのかかわりについても、具体例を交えて積極的に論じられている点もこれらの問題に腐心する臨床家としてはとてもありがたい。

抗認知症薬については、わかりやすく効果検証についてまとめたいので、どう使うべきか、本人に伝えるべきメッセージについての論考に紙幅が割かれている。著者が医師に、薬物療法を過信すべきではないと述べたとき「認知症診療で、薬に効果が乏しいなら、何をしたらよいかかわからない」と問われたのに対して、「医師が普段の診療で行っているのは、本当に薬物療法だけでしょうか、実は、気づかないうちに、薬物療法以外の大切なことを伝えているのだと思います」と返している。また「抗認知症薬の有効性には限界が大きいとおっしゃいますが、抗認知症薬を始めた後、ご家族から本人の笑顔が増えた、口数が増えたという問いには、その笑顔の理由は、薬物によって認知症の進行を、わずかに、良くて数年遅らせることができたからというより、医師が処方箋と一緒に、認知症をもちながら日々過ごしていくヒントを提示し、具体的な方法を共に考えていく過程が、本当の理由ではないかと返している。また、レビー小体型認知症の幻視など周辺症状の意味について掘り下げて述べられている項目では、認知症をもつ人に伴走するとはどういうことか、秀逸な記載がなされている。

今までの認知症診療に不全感をもったときに、それまでの自分なりの経験やエビデンスを一旦脇に置き、優しい語り口に耳を傾けるように読んでいただきたい一冊である。

(今村弥生)